1　道徳部会「仮説①」

目指す子ども像　「自分が好き　友達が好き　学校が好き　帯広の街が好きな帯小っ子
(1)学びの主体意識をもち，自己を見つめこれからの生き方について考えたり深めたりする子ども
(2)学びと生活をつなげ，よりよく生きようとする子ども

研究主題　予測困難な時代を生き抜き，自分の道を自ら切り拓く子の育成
～伴走者としての教師の姿と，本音で語る子どもたち～

仮説 1

児童の思いや問いを生かしたり，教材の特質を生かした指導や児童の実態に沿って指導を工夫したりすることで，児童は教材と自我関与を図りながら自他との対話を行い，道徳的な問題を自分事として捉えることにより，自己の生き方について考え，自分の道を自ら切り拓こうとする子どもが育つであろう。

具体的な手立てとして

① 導入の工夫
② 学習過程の工夫
③ 発問の工夫
④「問い」を児童から
⑤ 掲示物「かがやき」

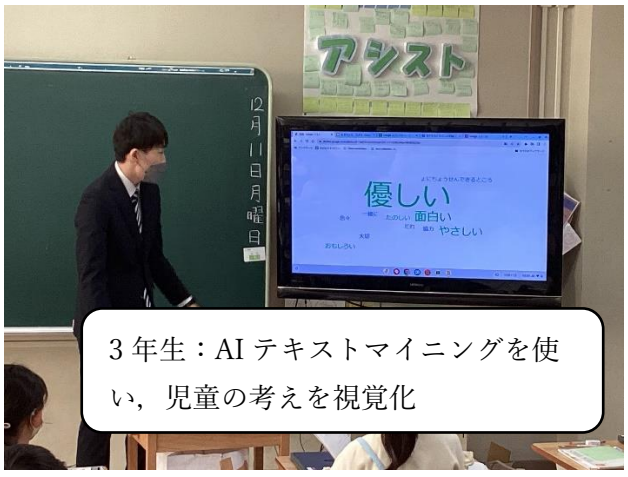
①導入の工夫

導入では道徳的価値に関わる子どもの「？」を大切にして課題を設定する

直接問われるとプラス面の回答　思考のずれ　**アンケートはマイナス面の回答**

このずれを使い，問題を焦点化して問題意識をもたせることが大切

その他にも,自分たちの生活を想起させて課題につなげたり,授業で取り扱う価値について直接的に問うたり,挿絵の活用などもあります。時間の目安としては 3～7 分を考えております。



3 年生：AI テキストマイニングを使い，児童の考えを視覚化

1 年生：給食が教室に落ちていたときの画像

昨年度は ICT を活用してアンケート結果や日常の姿を共有する実践も見られました。ICT の効果的な活用は今後のギガ部の提案も活用し，効果的な活用について探っている段階です。

②学習過程の工夫

道徳授業の基本的な流れ

導入

子どもの現状認識を明らかにする＝問題意識をもつ

課題の設定

〇〇について考えよう
本当の△△とは？
××のために大切なことは？

展開

教材

児童の問い

考える・議論する

補助発問・問い返し・中心発問

終末

共通解

納得解

共通解・・・課題に対して,皆で見つけた一定の望ましさ

課題についてみんなで考えたことを導き出すことができた価値に対する認識やこれまでの考え方を再構築したもの

例)男女の協力には,お互いが信頼し合うことが大切

納得解・・・課題に対して,個々の児童がたどりついた答え

自分も納得でき周囲も納得できるもの。独立しているが決して孤立していないもの。

例)友情とは弱さを見せられる関係
友情とはお互いを高め合う関係

中心発問・・・ねらいに迫るための決め手となる発問

☆「順庵が孝吉を許したのはなぜ？」(名医順庵)
☆「なぜ自分の夢でもあった大劇場への出演を断り，手品師は子供の前に立ったのだろう？」(手品師)
☆5 年生と 6 年生の違いは何？(バトンをつなげ)

☆読みの視点を明確に(感想をもとう・問題点は？など)　☆時間配分に注意する
☆感想交流をする場合は目的をもつ　☆納得解の交流の時間を確保する(交流しない場合もある)

「今後どうしていこうと思いますか」
「今日の学習で自分が思ったことは何ですか？」と学びを自分につなげて考えさせます。

昨年の校内研では，納得解を考える前に，価値に関わる日常の姿を示し，子どもたちの日常に価値付けし後押ししてあげる様子も見られました。その様子を子どもたちがとてもいい表情で見ていたのが印象的でした。

③④発問の工夫と　問いを児童から

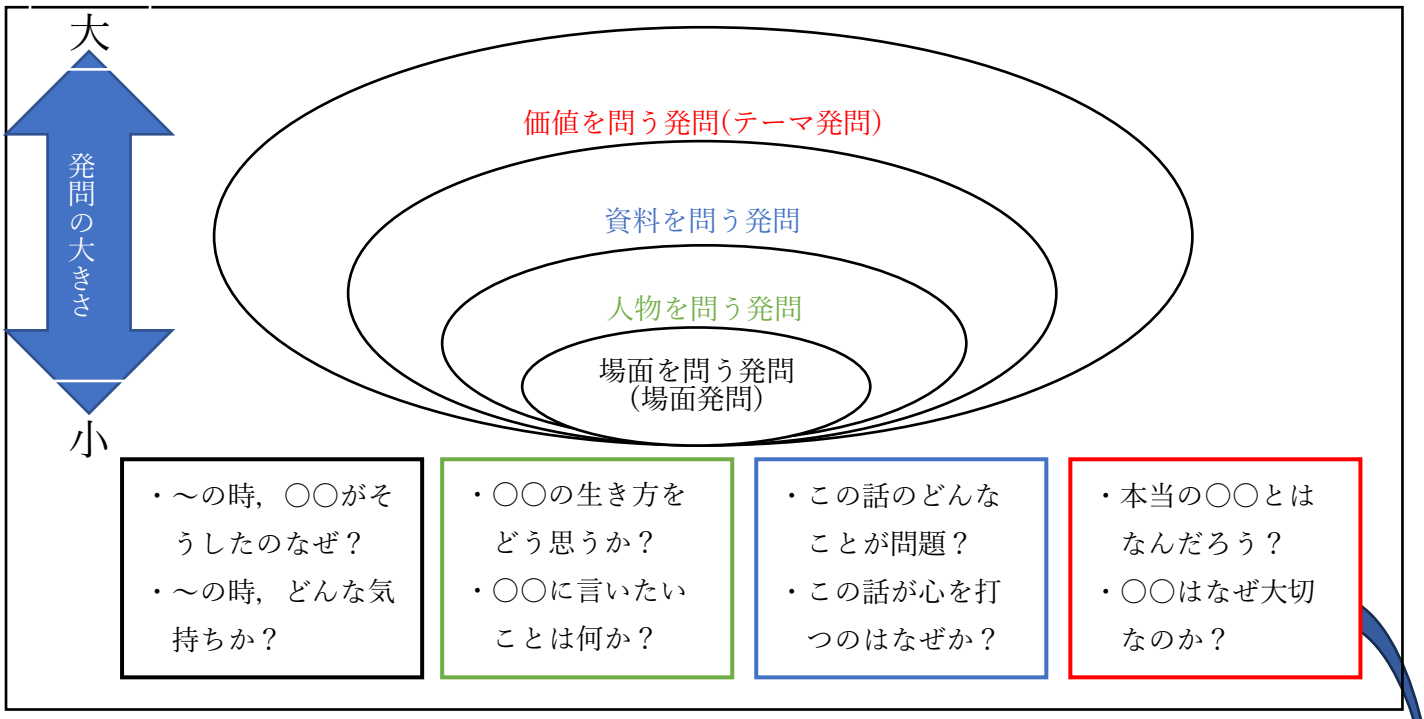
児童を自走させるために，発問の工夫を通して，「どうしてだろう」「考えたい」という思考につなげていくことが大切です。昨年の公開研の反省では

「発問は心情読解レベルで終わってしまうことがある。道徳的価値レベルの発問を意識してほしい」

というご指摘を受けました。そこで今年度も主題に迫る「テーマ発問」を意識していきます。

テーマ発問

☆資料の主題やテーマそのものに関わって,それを掘り下げたり,追求したりする発問
☆児童の考えに広がり（多面的多角的）のある発問



心情や状況を問う発問　２年生「黄色いベンチ」

・どうして２人はベンチに乗って飛行機を飛ばそうと思ったの？
・服が汚れてしまった女の子はどんな気持ち？
・女の子やおばあさんの姿を見て,２人はどんな気持ちになった？

登場人物の心情や行為の理由を問う発問

ここで終わってしまうと

本質に迫りきれないことがある

☆みんなが使うものを使うとき,どのような気持ちや考えがあればいいのだろう？
☆２人は今後どんなことを大切にして行動するだろう？
☆きまりを守ることはなぜ大切なのだろう？

テーマ発問は児童が自分事として考え,「もっと考えたい」「どうしてだろう」と学習に熱中させる一つの手段です。ですから，どのタイミングでテーマ発問を用いるかはその教材のもつ力や児童の実態，発達段階によっても変わってくると考えます。

５年生の実践から(バトンをつなげ)

感想交流
・教科書の登場人物の気持ちが分かるなあ
・ぼくたちも縦割りで仕切るのがうまくいかなくて困っている
・６年生ってやっぱりすごいな

自己投影し，本音で語る子どもたち

・みんなはそんな６年生になれそう？

・４月になれば自動的に６年生だよ。４年生から５年生になったときと同じでしょ？

教師からの問い返しで，問いを焦点化させていく

児童が考えた問い(中心発問)「5年生と6年生の1年のちがいは？」

５年生の授業では，「感想交流→問い返し→児童がさらなる問いをもつ」という展開でした。計画的な問い返しにより，児童から問いが生まれ，その問いにはテーマ発問的な要素を含むものとなっておりました。

１年生の実践から（なくしたボール）

教師「その後，みんなが校庭に飛び出していったのはどんな気持ちからでしょう」
・みんなが使うものだから
・ぬすまれたらどうしよう

「つまりボールがなくなれば，みんなで探せばいいということなんだね」

テーマ発問「みんなのものや場所を使うときに考えた方がよいことは？」

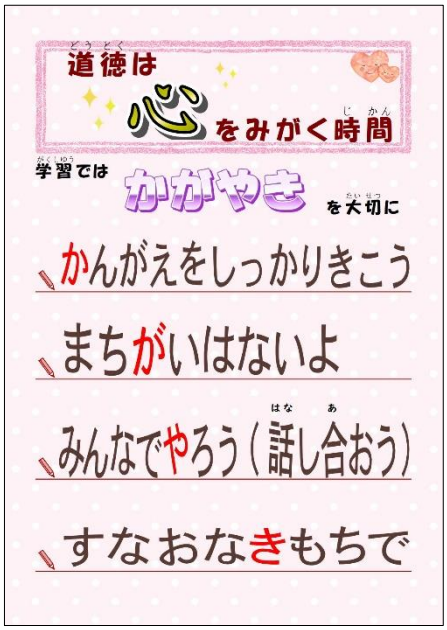
「探せば解決」ということではなく，そもそもの問題点はみんなで使うボールだからこそ何が大切なのか，教師はここを中心発問にもってくるために，計画的な問い返しから，テーマ発問的な要素を含む中心発問を設定しました。

児童からの問いを引き出すポイントの一つは計画的な問い返しです。問い返しで児童が考えもしなかった視点でその価値について考えるきっかけを与えることにより，新たな疑問が生まれます。高学年ではあればそういったやりとりを通して児童から問いが生まれ，それを中心発問に設定できれば最高です。また，昨年の１年の授業では最初の発問が「お話の中に親切な人はいましたか？」というテーマ発問からスタートしました。その後，登場人物の心情を考える中で，親切について考えを広げる展開となっていきました。テーマ発問が最初にくることもあれば，５年生のように中心発問にくることも考えられます。テーマ発問という考え方はあくまでも手段です。結果，児童の問いがふくらみ，「子どもが主語の授業」につながっていくことを目指していきたいと考えております。

⑤　掲示物「かがやき」

道徳の授業で大切にしてほしいことを授業者と児童が共有するためのツールです。オリエンテーションでも活用をしています。教師が自身の授業を振り返るのにも役立つものです。学期始めや終わりなど,節目節目の振り返りの際にも活用しています。

①～⑤を通して,児童一人一人が自分の納得解を見つける時間を目指しています。また,ある児童が納得解を見つけたとき,教師や周囲の人がその納得解をその児童が考え抜いた価値ある結論なのだと受け止め,共感することを大切にしています。



〈参考・引用文献〉
「道徳教育５月号 道徳授業に『大きな発問』を取り入れる」　（2013 年５月 明治図書）